

宗教・・・ユダヤ人とユダヤ教

1. ユダヤ民族とは

ユダヤ民族はイエス・キリストを生み、世界人口の僅か0.25%を占めるに過ぎないが、ノーベル賞の約20%を受賞し、現代のアメリカで支配的地位にある民族です。彼等は古代から国を喪って各国では寄留者の辛い立場にありながら、ユダヤ教を民族意識維持の Identity にしてこの2,000年を生きてきました。キリストを磔刑にした罪深い民族(本当はローマ総督の仕業)としてキリスト教徒から迫害され、第二次大戦ではナチスにより600万人の人々がホロコースト(民族抹殺)に遭うなど、苦難の歴史を乗り越え、今日でも少数民族ながら世界に大きな影響を与え続けています。世界を知るにはユダヤ民族を知ることが必要です。

ユダヤ民族であるための条件には次の何れかを満たすことを求められています。

- (1) ユダヤ教徒であること
- (2) ユダヤ人の母から生まれていること

2. ユダヤ民族の祖・アブラハム

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷 父の家を離れて、私の示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなたを呪う者を私は呪う。地上の氏族は全て、あなたによって祝福に入る。」

(旧約聖書 創世記 11・31~12・3)

主は言われた。「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

(創世記 15・7)

考古学の研究者はユダヤ民族の祖・アブラム、後のアブラハムを4,000~3,900年前に実在した放浪の族長の一人だと推論しています。彼が世界最古の都市シュメルのウルを離れた時期は、アラム(エラム)の侵略を受けて「ウル第3王朝」が滅びた前2004年(約4,020年前)と時期的に重なっています。

メソポタミアの南部(イラクの南部)の7,800年前には小さい集落であったものが、3,000年の歳月の間に世界最古の都市へと発展しました。エリドゥ、ニップール、ウル、ウルクなどの都市の中心部は、灌漑用水を張り巡らした畑と、迷路のように張り巡らされた細い運河で囲まれていました。ここに都市が出現したのは、農耕民が水を引ける土地に束縛されたからであり、また、周囲の土地が殆ど乾燥しきっていたために自由に移動できなかったからです。

5,300年前には数々の試行錯誤の痕跡を後代に残して、遂に世界で最初の文字が誕生します。右の写真は、イラク南部のキシュ近くで出土した5,300年前の粘土板です。まだ、商品と数量が判る絵文字の域を脱していませんが、これが出土品として残された人類最古の文字です。これら初期の粘土板には、少なくとも1,500の異なった絵文字と象徴があり、それぞれが1個の具体的な対象を意味する単語を表現する**表語文字**です。こんな煩雑な方法では、抽象的な考えや、名前などを伝えるのが難しかったので、やがて、記号を単に**特定の発音**に対応させる**表音文字**となり、本格的な文字へと発展します。文字の概念



がエジプトに伝わって3種類のエジプト文字が成立(漢字、平仮名、片仮名 **最古の文字板**(「文字の歴史」p35)と似た関係)し、その内の表音文字が変遷を経てアルファベットとして現代社会に伝えられています。

文字の概念は中国にも伝搬し、3,400 年前に全く試行錯誤の痕跡なく漢字が出現しています。

アブラハムは世界最古の文明の子なのです。ユダヤ教は原始的な沙漠の民の宗教ではありません。

アブラハム等が生地を離れなければならなくなったウルの滅亡は環境災害によるもので、アラムの侵略は弱体化したウルへの止めの一撃に過ぎませんでした。

……4,400 年前頃、どこか北方で大規模な火山の噴火があり、大気中に細かい灰が大量に噴出した。
……ウルの君主にとっては不幸なことに、噴火と同時に 278 年間にわたる干ばつが始まり、……干ばつは、嘗ては肥沃だったユーフラティス川沿いのハブール高原を、沙漠に近い状態に変えた。……農民は農地に流れ込む水の量を増そうと、懸命に用水路の手入れをした。楔形文字の刻まれた銘板によれば、市の当局は配給する穀物をテーブルスプーンで計るようになった。……やがて彼らは無法な手段に訴えるようになり、食糧探しに血眼になりながら奥地に移動した。……ウルの農業経済は揺らぎ、やがて崩壊した。……この時、初めて**都市が丸ごとそっくり崩壊したのだ**。……（「古代文明と気候大変動」p24~26）

……イラク南部は、世界で一番灌漑をやってみたくなる場所の一つであると同時に、それを維持するのが一番難しい場所の一つであった。「進歩」が仕掛けた史上で最も魅力的な罠の一つだ。数世紀にわたる大豊作の後、**（塩化した）**大地は耕作者たちに逆らい始めた。問題の最初の兆しは、炭鉱労働者のカナリアにも似た役割を果たす小麦の収量減少であった。時と共に、シュメル人は小麦より塩分に強い大麦への乗り換えを余儀なくされた。紀元前 2500 年（4501 年前）までに作物中に占める小麦の割合は僅か 15% となり、紀元前 2100 年にはウルの小麦生産は完全に放棄されていた。……（「暴走する文明」p94~95）

文明最開化の生地を離れて放浪の民となったアブラハムの一族は各地で傭兵や牧羊などをやりながら生計を立て、居留者としての弱い立場で生存のために辛酸を舐め尽くしてしたたかな生存術を身につけます。

創世記 12・10「エジプト滞在」に妻サラを妹と偽ってエジプト人の好意を得るエピソードや、創世記 18・22~33「ソドムのための執り成し」の神に対しての彼の巧妙な駆け引きにも、その一端が見られます。

この厳しい生活でアブラハムを支えるのは、彼を助け、彼に励ましを与えてくれる神への絶大な信頼でした。神は彼の祈りに応えて、しばしば彼に語りかけます。今日の精神神経学者は深層心理の願望が表層意識に強烈に現れる **Projection** だと診断するかも知れませんが、神は彼には実在の人格神として顕現します。

厳しい立場に置かれた彼を癒し励ます神の性格が部族神的であることはやむをえません。また、当時の中東の神々は人間に生命を与えるために自らのエネルギーを大きく消耗するため、恵みを受けた人間は、その初子を神に犠牲として捧げるケースがありました。これが創世記 22・1~19「アブラハム、イサクを捧げる」のエピソードに姿を現しています。

アブラハムの神はユダヤ教の唯一神へと昇華して行きます。

ユダヤ史を通じて、ユダヤ教には四つの形成期があります。

- （1）アブラハム時代： 4,000 年前頃～／原初ヤハウェ宗教の成立： 部族神から唯一神へ
- （2）モーセ時代： 前 1225 年頃～／ヤハウェ宗教の確立・深化： 唯一神だが保護神の性格強い
- （3）バビロン捕囚時代とその直後： 前 597 年～／ユダヤ教としての発展： 普遍性ある世界宗教へ
- （4）ローマによる第二神殿破壊後： 70 年～／ユダヤ教としての洗練： ユダヤ民族の目的意識強化へ

3. モーセまで

ユダヤ教の正典であり、キリスト教では旧約聖書と呼ぶ書物は新共同訳で 1,884 頁ありますが、前 1225 年頃の出来事である出エジプト記の前までの約 2,780 年分（アシャー大主教説の天地創造は前 4004 年による）

について書かれた「創世記」は 93 頁の簡単なものです。この期間は恐らく伝承に基づいて書かれたのでしょう。登場人物が全て生き生きと書かれた素晴らしい文書です。

創世記を要約しますと、天地創造／アダムとイブの楽園追放／カインとアベル／アダムの系図／ノアの洪水／ノアの子孫／バベルの塔／セムとテラの系図／アブラハムの召命と移住／ソドムとゴモラの滅亡／ヤコブとエサウ／ヨセフ、エジプトの宰相となる／ヤコブ一家、エジプトに移住／となります。

アブラハムがハビル(居留の民)であったように、この時代は自分の領土を持たず、傭兵などをしながら各地に居留させてもらう立場の部族でした。

エジプトではヨセフがファラオの夢解きをして飢饉対策のため宰相となり、飢饉の年に父ヤコブの一族は暖かく迎え入れられます。当時の王朝は中近東出自の民族の王朝でした。しかしその後、王朝が地着きの民族に代替わりするとユダヤ人は邪魔者扱いされ、奴隷の身分に墮とされます。

数千人規模のユダヤ人を指導者モーセはエジプトから脱出させます。シナイ山でモーセは神と契約を結び、十戒を授けられ、これをユダヤ人の律法(憲章)とします。ユダヤ民族は「契約の民」と呼ばれるようになります。キリスト教徒はこの契約を**旧約**と呼び、イエスが人類に与えてくれた契約を**新約**と呼んでいます。

十戒: ①あなたには、私を措いて他に神があってはならない／②あなたは如何なる像も造ってはならない(偶像の禁止)……／③あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない……／④安息日を心に留め、これを聖別せよ……／⑤あなたの父母を敬え……／⑥殺してはならない／⑦姦淫してはならない／⑧盗んではならない／⑨隣人に関して偽証してはならない／⑩隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、驢馬など隣人のものを一切欲してはならない。(出エジプト記 20・4~17)

4. 征服者ヨシュア

同胞たちがエジプトで苦役に苦しんでいる時も、嘗てシケムを支配していたヤコブの部族でこの地に残った人たちがシケムを支配し続けています。また、出エジプト後の 37 年間の荒野の放浪といいますが、実情は定住していたアマレク人から奪った肥沃で水の豊富なカデシュの土地で生活しています。

モーセの後継者ヨシュアは、シケムの同胞たちと合流し、軍団を編成して「神の約束の地」カナンを襲い、先住のカナン人から土地を取上げ、農奴化して定住地を確保しました。しかしこの行為にイスラエル人が罪の意識を抱いていたことが旧約聖書に何回も示唆されています(民数 33・50／ヨシュア 24・8／士師 11・17／サムエル下 7・23)。

対照的に、同じ土地を争ったペリシテ人は最も略奪的な侵略者であったから良心の呵責はありませんでした。彼等はミノア文明を滅ぼし、エジプトに侵入しましたが、第 19 王朝の偉大なラメセス 3 世に追い払われ、北東に転進してパレスチナに定住しました。鉄製の武器を有し、封建的軍事的貴族制度により規則正しく組織されていました。

彼等と衝突したイスラエル人は絶滅の危機を乗り越えるために王政を選択します。王政採用の最初の試みは惨憺たる失敗に終わります。初代王サウル戴冠の翌年(前 1005 年)、ペリシテ人の大軍が攻め上り、新しい王国軍をギルボア山で打ち破り、サウルと息子ヨナタンは殺されてしまいます。

5. 祭司王ダビデ

流れを変えたのがダビデです。ダビデは青年時代にサウルに仕えたものの、彼の職業軍人としての訓練は**ペリシテ人の傭兵**として受けています。彼は新兵器であった鉄製武器の使い方を含め、ペリシテ人の戦い方を身につけます。ペリシテ軍の司令官として、また失策続きのサウルと対抗する者たちの指導者として、ダビデは自分のまわりによく訓練された騎士や兵士の一団を集めます。サウルの死後、ダビデがユダの王にな

れたのは、彼らの軍事力がベースにあります。

ユダヤ人はダビデの治世(在位前 1000~前 961 年)を黄金時代とみなしています。①王政は冷酷な軍事的必要性に迫られて誕生しましたが、彼はこれに宗教的権威、オリエントの壮麗、文化を加えて融合し、輝かしい制度へと巧みに転換しました。②第二にペリシテ人を完璧に撃破し、海岸沿いの狭い地域へ永久に押し込みました。その後、アンモン、モアブ、アラム・ツォバ、アラム・ダマスコの地まで勢力範囲に収めます。③地政学的にイスラエル王国とユダ王国を分ける位置にあり、200 年間にわたってユダヤ民族が手に入れることが出来なかったエルサレムを彼は私兵をもって陥落させ、ここに**国民的宗教的首都を創設し、統一イスラエル王国**を実現しました。エルサレムが「**ダビデの町**」と言われるのは、文字通りダビデの財産なのです。

6. ソロモンの絶対君主制

ダビデの後継者ソロモンは非常に優れた才覚を有したオリエントの王になります。

彼の知恵ある者としての名声は、好んで冷酷な君主たらんとしたことによります。先王の側近であった大臣たちを時には殺害までして全員排除し、体制の変革と方向の転換を図りました。

ダビデは軍隊を組織する過程で、南部から徴兵した「**ユダの人々**」を主要部隊の中核に据え、反抗的態度をとった北部の「**イスラエルの人々**」には兵役を課さず、賦役(強制労務)の制度を導入してます。ソロモンはこの制度によりエルサレムを国家的宗教的な王国の中心とする建設工事と、3000 台の戦車と 4000 頭の馬を置く 3 つの城砦都市の建設等を行います。こうした王の砦は、その存在そのものがイスラエルの神政民主主義に対する侮辱でした。確かに治安は完璧に保たれました。各部族は戦車を有していなかったからです。

ソロモンは人口調査の結果をもとに、全国を 12 の行政区に分割し、各部族に税金を課しました。また、領土を整理して防衛に費用がかかる地域から撤退します。更に、「王の商人」を用いて交易に精を出し、税収を増やすため、内外の貿易商に彼の通商路を使うよう勧めました。

近隣諸国の王の娘との婚姻を通じて交易を拡大します。「花嫁に続いて通商あり」です。

貿易と徴税によって得た多くの富をソロモンは王都建設に注ぎ込みました。壮麗な較べるものなきソロモンの神殿は、城壁で囲まれた王宮のあるアクロポリスに堂々と建っていました。しかし、**この神殿とモーセが荒野からもたらした純粋な宗教との間に殆ど何の関係もなかったのは明らかです。**

後にユダヤ人は、ソロモンの神殿を初期の信仰に欠かせない要素とみなすようになります。しかし信仰心の篤い同時代人の目にはそうは見えなかったはずです。強制労働、徴税の行政区、戦車等と同じく、神殿は馴染みがなく、異教徒のより進んだ文化を単に模倣したものに過ぎませんでした。十戒を収めた**契約の箱**そのものが、この壮麗な場所ではひどく場違いに見えたに違いありません。イスラエル人の厳密な信仰に従えば、**契約の箱**は単に神の戒めを収める容器に過ぎません。それ自身は礼拝の対象ではありませんでした。

ソロモンは彼の国家の要請と彼が理解する宗教の間に一種の妥協を見出します。全能の神の物理的実在ではなく、象徴的実在を想定します。「この家、あなたが『わが名はそこにとどまる』と言われた場所に向かって、夜も昼も目を開いていてください」(列王上 8・29)。これこそ後代が神殿を信仰の中に位置付けた方法でした。ソロモンが推進した宗教改革に対する反感と、彼の容赦ない統治のやり方や過酷な徴税が重なって、父親が築いた統一王国を長期に互って維持することは結局不可能となります。

ソロモンの巧妙さと栄光が何とか王国を持ちこたえさせたものの、治世最後の日々は既に体制は綻び始める兆候がありました。ソロモンが導入した強制労働の制度は、エジプトでの苦役を思い出させるために特に不快でした。祭儀をエルサレムに集中させることによって、ソロモンはアブラハムと結び付きが強いシケムや、ヤコブと関係が深いベテルのような北部の聖所の重要性を低め、反感を買います。北部の人々にとってはソロモンとその王統が精神破壊者であり、世俗的な圧制者であると、ますますはつきり映ります。ソロモンは前 925 年に逝去しました。

7. 南のユダ王国と北のイスラエル王国への分裂

彼の後継者レハブアムには統一を維持するだけの軍事力と才覚を持ち合わせていません。北部の人たちはイスラエル王国を立ち上げます。歴代のユダヤ人が理想とする統一イスラエル王国は1世紀も経たずに分裂しました。北王国は約2世紀の繁栄を謳歌しました。しかし、古代より南と北の列強の軍事行動で何回も軍用道路になった歴史があるこの地域では、分裂した小国は列強の争いに巻き込まれて翻弄される運命にあります。前734年、好戦的なアッシリアは北王国を征服し、北イスラエルの10部族は捕囚としてアッシリアに連れ去り、そこで定住させられます。それに代わってカルディア人とアラム人がバビロンから送り込まれ、イスラエル王国に定住します。結局、**10部族は周辺のアラム人社会に吸収され**、固有の信仰と言語を失い、歴史から姿を消して神話の世界に埋没してしまいました。この悲劇から逃げ出して、他国に移住した人たちが多数います。この人たちがディアスポラ(散らされた者たち)の第1波になります。

残ったユダ王国は北王国より貧しく、文化的にも後進地域でした。前701年のアッシリアの猛攻にエルサレムは耐え抜き、アッシリア軍では陣中で腺ペストが発生し、撤退します。前612年、アッシリアはバビロニアとメディアの攻撃を受けて滅亡します。

ユダ王国も前587年にバビロニアにエルサレムを陥落させられます。彼等は残虐ではなく、被征服地への異民族の植民は行われませんでした。前588年に降伏したベニアミン族は捕囚となることを免れました。

バビロニアも前539年、ペルシャ人とメディア人の連合軍を率いるキュロス大王により滅亡させられます。大王はユダヤ人を故郷に帰還するよう促します。

再建されたエルサレムは以前より小さく貧しく住む人も少ない都市です。ネヘミヤがユダのあらゆる地から抽選で選んで入植させてやっと格好が付きしました。この事業が完成した前400年から前200年まではユダヤ人は支配者ペルシャ人に協力して平和な時代を過ごします。

8. 旧約聖書の成立

前734年から前581年の間に、イスラエル人は6回捕囚とされています。エジプトやオリエント各地へ自発的に多数の人たちが逃れます。散り散りになり、指導者をなくし、自分の国家を持たず、ユダヤ人は彼等自身のアイデンティティを保持するために、自分たちの書物、律法と過去の記録に頼ります。

ユダヤ人はバビロンでは、それほど悪い処遇を受けていません。創世記が書かれたのも、信仰上の様々な戒律が重要視され始めたのも捕囚時代です。これまでにあった膨大な量の歴史、政治、宗教に関する文献を分類し、選別し、編集しています。量だけで計っても、ユダヤ民族は古代最高の文学を創造した民です。旧約聖書はその一部に過ぎません。旧約聖書はこの時点で正典として完成し、以後は新しい予言者が現れても全く収録されなくなります。

紀元前444年に「モーセの五書」が正典化されました。その後の500年間でユダヤ人はペルシャ、ギリシャ、ローマの支配下であって、今日、旧約聖書を構成している各書を書き、再編纂し、公に認めて正典化したのです。「エズラ記」と「ダニエル書」の数章がアラム語で書かれている他は、全てヘブライ語で書かれています。ハスモン王朝の時代に各書にヘブライ語の題が付けられ、各書の順序も決められます。その題も順序も今日に至るまで変わりません。

今日、われわれが手にすることができる最も初期のヘブライ聖書は「レニングラード写本」として知られているもので、1009年に書かれたものです。この元は8世紀から9世紀にかけてパレスチナで活動していたユダヤ人学者たちのグループまで溯ることができます。彼らはマソラ(ヘブライ語で「伝統」を意味する)学者という名で知られます。ヘブライ語はもともと、速記術のように子音だけで書き表わされてきました。マソラ学者たちはヘブライ語の「旧約聖書」の原文に母音記号、句読点、欄外註を加えて校訂本を編纂しました。そして時には、マソラ学者は母音の推定を間違えて、ヘブライ語の感覚とリズムを壊してしまうこともあったのです。現在、国際会議において約5000の問題箇所を改訂する作業が進められています。

9. ヘレニズム都市とギリシャ語

ローマ帝国が地中海世界の東半分に覇権をのびた時は、既にヘレニズム諸王朝の支配が二世紀半も続いた後です。その間に、ギリシャ語が支配の言語としての地位を確立しています。ローマ帝国はこの地域を軍事的・政治的に支配したけれど、文化的にはあまり支配できていません。むしろローマ帝国の支配者も帝国の東半分を支配するためにはギリシャ語を用いざるを得ませんでした。

この時代でもパレスチナにはユダヤ人だけが住んでいた訳ではありません。征服者ヨシヤやダビデやソロモンが征服した先住諸民族との関係も微妙でしたが、ギリシャ時代からローマ時代にかけて、退役軍人に退役資産と年金を与えるために、帝国内に網の目のように**多くのヘレニズム都市**が作られています。これらの都市住民たちはギリシャやローマの出身者とは限らず、そうでない場合が多かったのです。さまざまな経路を経て、帝国の支配に参加した人々です。属州の人が兵役を **25 年間**勤め上げると **ローマ市民権**が与えられ、直接税を免除され、市民権は子供に引き継がれました。タルソス(現トルコ領) 出身のパウロもこうした経緯でローマ市民権を得ていたのでしょう。パレスチナのヘレニズム都市としてはスキュトポリス(旧名ベト・シヤン)、サマリア、カイサリア等があります。

ヘロデ王の息子ヘロデ・アンティパスはギリシャ風都市を幾つか建設しました。17～22 年の間にガリラヤ湖畔のティベリアス(ナザレに近い) へ新しい行政の中心を設け、住民を確保するため周辺の田園地帯に住むユダヤ人を強制して農地を捨てさせ、この都市へ移住させました。ヘレニズム都市でありながら住民の大多数がユダヤ人だというのは、他に例がありません。

10. ヘブライ語とアラム語

歴史上極めて珍しい出来事ですが、ユダヤ民族の言語は途中からヘブライ語からアラム語に変っています。彼らは民族としては強固な独自性を保ち、政治的にも独立ないし半独立の状態にありながら、言語については、自分たちの伝統的言語であるヘブライ語を用いなくなり、周囲の世界の支配的言語であるアラム語を日常語として用いるようになってしまいました。

アッシリア人はアラム人を征服支配しましたが、アッシリア人自体が結局アラム語をオリエント全土に公用語として広めたのです。アラム語は前八世紀頃から徐々にパレスチナに浸透しはじめ、前二世紀には明瞭にユダヤ人の主たる日常言語になっています。ユダヤ人はアラム語を日常言語とするようになる遥か以前からアラム文字を自分たちの言語に採用しています。今日我々がヘブライ文字として知っているあの箱型の文字は、アラム文字です。古ヘブライ文字はもう少し形が違っています。しかし、これは多分使いにくかったせいでしょうか、かなり早い段階でアラム文字にとって代られています。

紀元一世紀のパレスチナではヘブライ語は文章語として残っています。旧約聖書はヘブライ語で読まれ続けていたし、ユダヤ教の宗教文書もヘブライ語で書かれ続けています。時代が進んでパレスチナの外に出ていったユダヤ人は、日常生活はそれぞれの周辺世界の言語で営みつつ、自分たち独自の宗教的文章語としてはヘブライ語を保存し続けています。

二世紀にそのテキストが定着したミシュナ(律法解釈の伝承の基本的な部分) によれば、シナゴグの礼拝において聖書が読み上げられる時、「(律法の場合は) 通訳に対して一節以上読んではならない。予言者の場合は三節以上読んではならない」と記されています。ヘブライ語で一気に長く読むと、それをアラム語に翻訳する通訳がついて行けなくなってしまうから、一文ずつ区切って読み上げ、通訳させるという方法を取ったのです。予言者のテキストは律法ほど一字一句重要視されなかったから三文ずつ読み上げて、効率よく通訳させました。そして礼拝の区切りで、会衆は宗教言語であるヘブライ語で「**アーメン**」と唱和しています。

なお、発足当時のパレスチナのキリスト教がアラム語を用いていたことはパウロの引用によって判ります。そしてギリシャ語が用いられていたコリントスの教会では礼拝の区切りに「マラナ・タ」(主よ、来りませ)とアラム語を宗教言語として唱和していました。

11. ヘロデ王の頃

前 161 年、ユダヤは勃興中のローマと同盟し、ローマはハスモン家を独立国の統治者として認め、ハスモン家はこの地位を 115 年間保持し、ユダヤの版図を拡大します。前 142 年、これまでの支配者ペルシャのセレウコス朝は税の免除によって独立を事実上認め、ユダヤは 440 年振りに独立国家となります。

前 63 年、ユダヤは躍進するローマの属国となり、エドム出身で父がカエサルの副官であり、ローマから信任を受けて王位に就いたヘロデ王(在位前 37~(紀元)4 年) がユダヤ人をローマ帝国の行政機構の中にしっかり組み込みます。

ヘロデ王は類い希な壮麗・豪華な第二神殿を建て、ディアスポラ(世界各地に離散したユダヤ人) に神殿に参詣するように奨励します。大祭の日には世界各地から集まる何万人というディアスポラを相手に、門や回廊に神殿への献金を両替する両替商たちが店を張ります。イエスが後に怒りをぶつつけた(マタイ 21・12~13) のはこの両替商でした。

12. イエスとガリラヤ

マルコによる福音書によれば、イエスが「出てきた」のはガリラヤであり(1・9)、イエスが「神の国」が近づいたことを宣言されたのもガリラヤであり(1・14)、最初の弟子を選らばれたのも(1・16)、最初の「力ある業」を行われたのもガリラヤであり(1・28)、イエスは「ガリラヤの全地を巡り歩いた」(1・39)のであり、「おびただしい群衆が従ってきた」のもガリラヤであり(3・7)、絶えず立ち帰るのもガリラヤであり(7・31)、かならずガリラヤを通して行かれた(9・30)のです。

この地は遠く王国時代から「ガーリール・ハ・ゴーイム」(異邦人の地域) と呼ばれた地域であり、「ガーリール」がギリシャ語に移されてガリラヤになっています。ガリラヤの人々はユダヤ教徒には違いないが、歴史上の種々の強大な諸外国によって蹂躪され、支配され、苦しめられてきた弱小の地の住民であり、600 年もの間、中央から疎外され軽蔑されてきた地です。それにガリラヤには「アム・ハ・アーレッ」(地の民) と呼ばれた極めて貧しい民衆が生活しており、彼らは正統ユダヤ教徒たちからは「良心を持たず、まともな人間とは言えない」とまで侮辱されて、律法を学ぶことさえ妨げられており、最下層の賤民として差別されています。

その他、外国人でその地方に植民した者たち、ユダヤ化された下層ギリシャ人などの居住地がありました。そのためか、ガリラヤは反権力的気風が強い地域でもあり、「ゼーロータイ」(熱心党) の多くが住んでいる地方でもあります。そしてガリラヤはギリシャ化が進行した地域でした。それは名前にも現れています。

イエスはヘブライ名ヨシュアのギリシャ語形です。紀元前 2 世紀頃から神に選ばれた人物をマシアー、「油を注がれたもの」と呼ぶようになっていきます。このヘブライ語はアラム語を経てそのままギリシャ語に音訳され、メシアスとなります。一方、ギリシャ語では「油を注がれたもの」のことをキリストと呼びます。

イエスの名をヘブライ語でなくギリシャ語で呼ぶことに、ヘレニズム化が進んだガリラヤの実情が見えます。大工であった父ヨセフは 28 年頃、イエスが洗礼を受ける前に亡くなっています。ギリシャ語の新約聖書に現れるヨセフはヘブライ語の名前ですが、母はマリアと呼ばれ、これはヘブライ語ミリアムがギリシャ語化したものです。

イエスの兄弟の内、ユダとシモンの二人はヘブライ語の名前となっているが、他の二人ヤコボスとヨセスはギリシャ語名で、そのヘブライ語名はヤコブとヨセフです。

新約聖書にはイエスの教えにより家庭内に緊張が生じたことを示唆しています。しかしイエスが亡くなった後、一家はその教えを受け入れました。弟のヤコボスがエルサレムにあった宗団の長となり、彼がサドカイ派の手にかかって殉教すると、イエスの従兄であるシモンが跡を継いでいます。イエスの弟ユダの孫たちは、トラヤヌス帝時代、ガリラヤに所在するキリスト教徒共同体の指導者となっています。

ユダヤ人はイエスを磔刑にかけた罪深い民族として、欧州の人々から非難され、弾圧されますが、ユダヤ人の死刑は石打ち刑、ローマの死刑が十字架刑である明白な事実から目を逸らしています。キリスト教は後に

ローマの国教となりますから、**ローマに都合の悪い記事は書けない**のです。死刑前夜の大法院での裁判も、ユダヤ人は冷静な判断力を保つため夜間の裁判は行わない規定に反しますし、必ず付けなくてはならない弁護人なしの裁判もあり得ません。提督ピラトこそは後日、常軌を失した残虐な施政を行った廉でローマ政府から罷免された人物です。真相はイエスのエルサレム入城がユダヤ人に熱狂的に迎えられたため、騒乱を起こす前に先手を打って死刑にしたのでしょう。

似たような記述が使徒言行録 28・30～31 に「パウロは自費で借りた家に丸2年間住んで、訪問する者は誰彼となく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」とまるでハッピーエンドのように終わっていますが、その後、ネロのコロセウムでのキリスト教徒虐殺の犠牲となって殉教していることには触れていません。

13. ローマ・ユダヤ戦争

ヘロデ亡き後、彼の息子は統治能力がなかったためにローマは彼を廃位し、ローマの長官が直接統治します。イエスの会った総督ピラトがそれです。

ヘロデ王の孫に当たるヘロデ・アグリッパは有能だったので、ローマは37年に彼にユダヤの統治権を返還しますが、彼が44年に死んだ後、優れた後継者に恵まれず、またもや直接統治に戻らざるを得なくなります。ユダヤ人の本当の問題は、彼等が余りに文化的に進んでいて、外国人の統治を受け入れるには知的水準が高すぎたことにあります。

ギリシャ人は彼等の思想が浸透した文明が支配する世界「オイクメネ」と、その彼方にあって広がる混沌たる世界「カオス」とを区別して考えます。「オイクメネ」は多人種多国民から構成される社会と捉え、その受容を拒む者は人類共通の敵と考えます。また、ユダヤ人が語る彼等自身の宗教史はギリシャ人の目には攻撃的だと映ります。前4世紀頃から始まったこの非難は、ユダヤ人に関する偏見と作り話が一旦出来上がると、際限なく繰り返され、エスカレートします。このようにして、年月をかけて普遍化を目指すギリシャ人と、普遍化を拒むユダヤ人は犬猿の仲となります。

当時のローマの直接統治は不手際が目立ち、成功していません。慢性的財政破綻状態にあり、総督は税の未払いを徴収するとの口実で神殿の献金を収奪して民衆の怒りを買います。ユダヤ人の不満分子の集団(熱心党など)が町を徘徊し、一触即発の状態になります。

66年のカイサリアでのギリシャ人とユダヤ人との訴訟でギリシャ人が勝訴した直後、暴動が発生します。これはエルサレムに伝搬し、ギリシャ系地域の出身者が占めるローマ兵士が掠奪したため、ユダヤ人の過激派がエルサレムに集結し、兵士たちは虐殺されます。ローマ軍は治安回復のためにエルサレムに向かって進軍しますが、ユダヤ人の抵抗に反撃されて退却します。遂にローマは4軍団を集結し、本格的な反攻を開始します。これはローマ帝国の最盛期にあつて4年間にわたり最強のローマ軍団を相手に、戦い抜いた驚異の民族的抵抗でした。最後の拠点、マッサダの要塞での戦い抜いての集団自決は後世に語り継がれています。エルサレムは陥落してソロモン以来の神殿は破壊され、**全ての都市住民は追放**されます。ディアスポラの最後の波でした。

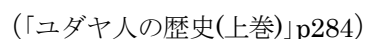
都市に食糧を提供する**農民たちは追放を免れました**。この人たちが残って現在のパレスチナ人となり、1948年に世界各地から帰ってきたディアスポラのユダヤ人によるイスラエル建国から、今日の解決が困難なパレスチナ紛争が始まった状況には恐ろしい因縁を感じます。

14. 不屈のユダヤ民族

前734年から前581年の間に、ユダヤ人は6回捕囚になっています。その時に逃げ出して世界の各地にユダヤ人が移住しています。この人たちは周囲の民族に同化されずにユダヤ人としての Identity を守り続け、

紀元前 100 年から紀元 100 年の約 200 年間、ギリシャとローマの家庭には何千本という安息日の蠟燭の炎がちらちらとゆらめいていました。ローマの哲人セネカなどはこの現象を憂えて、ユダヤ人の習慣が余にも一般に普及し、これではローマ人が彼らに精神的に征服されてしまう危険があると警告したほどです。キリスト教が活発に布教活動をやらなければ、それらの国々がユダヤ教の国になった可能性があります。紀元一世紀のローマ人口約 7000 万人の 10%に当たる約 700 万人がユダヤ人でありました。その内、約 400 万人がユダヤ人であった先祖の血を引くユダヤ人であり、残り約 300 万人は改宗してユダヤ人になった嘗ての異教徒とその子孫です。 厳格な食餌法と割礼の義務がなかったら、改宗者はきっと更に多くなっていたでしょう。原初キリスト教はパウロの時代にこの二つの条件を捨てました。そこで**入門資格がユダヤ主義ほど厳しくないキリスト教に異教徒は群がった**のでした。

外に見える形での彼等の特徴は、割礼と聖土曜日の安息日です。割礼は嘗てはエジプトや中東で広範に見られた習慣でしたが、アブラハムの頃には既に下火になっていました。これを神との契約の証と



して今日まで頑固に守り続けているのです。通常は成人式の行事として 13 歳頃に行うのですが、ユダヤ人は生後 8 日目に行います。

安息日は一切の労働を避け、特に火を使う仕事はしません。

前頁の右図のユダヤ人の分布はスペインの旅行家ビヌヤミンが作成したのですが、彼は最大都市コンスタンチノーブルに 2,500 人のユダヤ人が二つの共同体に分かれて住んでいたと記しています。

15. 迫害されるユダヤ人

ユダヤ民族の歴史は迫害の歴史です。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教は同じ神を信仰するとは言え本質的に異なる宗教ですから、宗教的に寛容な時代ばかりではなく、原理主義的な宗教的熱情が燃えさかる時期には、宗派(カソリック vs プロテスタント)が違うだけで同じ国民同士でも人口を半分に減らすような血を血で洗う宗教戦争(30 年戦争(1611~1648)等)が何回も起こっています。

(ドイツはプロシヤが再統一を果たす 1871 年まで約 300 の小国に分解され、欧州の後進国扱いでした。神聖ローマ帝国の嫡子の矜持を持ちながら近代の発展に遅れをとったこの恨みが 1914~1918 の第一次世界大戦、世界大恐慌を挟んで 1939~1945 の第二次世界大戦へと結実しています。1914~1945 を第二次 30 年戦争と呼ぶこともあります。)

これだけ信仰内容が異なる少数民族であるユダヤ人は、迫害の対象になり易かったのです。

また、先にギリシャ人とのトラブルの原因となったように、それ以外の人々にもユダヤ人が守る割礼と安息日と食事の禁忌の慣習は不愉快だし、土地の習慣に溶け込もうとしないユダヤ人は尊大で、異質で、何か異教的な悪業をやっているのではないかと見なされる原因にもなります。

1 世紀末にはローマ帝国総人口の約 1 割に及んだユダヤ人は、ローマ人になれないならせめてユダヤ人になりたいとの改宗者を多数引き込むだけの倫理的及び経済的魅力がありました。しかし、ローマ皇帝を神として崇めよと強制される時代には当局と衝突しており、その被害を避けるためにユダヤ教を捨てて周囲に同化した人たちが多数おり、ユダヤ人の見掛けの人口は一気に減少しています。

キリスト教が勢力を増すにつれ、イエスを磔刑にした罪人として頻繁に迫害の対象になります。

平均して寛容だったイスラーム教国でも時々、教義の問題等から迫害する為政者が現れる時期があります。このため、1 世紀には 700~800 万人はいたと推定されるユダヤ人の総人口は、10 世紀には 100~150 万人にまで減少しています。その最大の要因は、社会的に辛い立場のユダヤ人であることを捨てて、改宗して周囲の人々に同化・融合して行った人々が少なくなかった(非常に多かった)ということです。

キリスト教徒に寛容性がないとすれば、ユダヤ教徒には順応性がないともいえる状況です。

高い機動性：ユダヤ人は民族の歴史を通じて始終移住しています。歴史に鍛えられたユダヤ人は移住のエキスパートとなり、多くの移住の技術、特に、財産を一個所に集め、危険が訪れたら直ぐに別の物に交換できる技術を完成させます。楽器も移動に容易なバイオリンが好まれました。

商取引や技能、民俗文化、法が相俟ってユダヤ人の創造的機動性を発達させています。そのため、ユダヤ人はやって来たばかりで如何なる不運に見舞われても、何故か運転資金に事欠く様子がなく、新しい地域の人たちから歓迎されることが多かったのです。

また、最も有能な者を医者のような何処の支配者階級にでも重宝される職業に就けさせます。イスラーム社会でも、エジプトでも、ユダヤ人の医者は評判が良く、彼等は大きな公共の病院に勤め、或いは自分の村で開業医をやります。何処へでも出かけていったし、誰にでも近づくことが出来ました。医者家族は薬品、アヘン、薬草、香料、学術書などの関連物資の交易も行い、こうして発達した交易網によってユダヤ人は迫

害の危機が迫った時には何時でも別の国に移動できました。ユダヤ人の大家族制もお互いの絆を強固なものとし、一族の世界ネットワークを作る基盤となります。

世界最初のヴェネツィア・ゲットー： ユダヤ人を隔離するゲットーという言葉は、ナチスのホロコーストと並んで近代史に暗い印象を残す言葉です。1509年当時、スペインやポルトガルから追放されたユダヤ人約5,000人をヴェネツィアが受け入れていましたが、修道士の煽動により1516年頃にユダヤ人排斥運動が起こり、国は問題解決のため大砲の鋳造所の跡地である「ゲットー・ヌオヴォ(新鋳造所)」にユダヤ人を隔離します。これまでも自然発生的にユダヤ人が集まって暮らす特別区(チャイナ・タウンのような)は各地にありましたが、国が隔離地域を設けたのは、これが初めてです。

ユダヤ人は日中だけゲットーを出て商売を行うことを許されますが、夜間は閉じ込められます。この生活を送るために、ユダヤ人は特別の高額の各種の税金まで払わされます。だが、これも二面性があり、その後に他国のようにユダヤ人追放令が提案されても、「既に隔離している」という理由で議会を通りません。

ユダヤ人が世俗化するのを防ぐ機能もあります。彼等はイタリア語を話しますが、シェイクスピアの「ヴェニスの商人」の中にも書かれているように「市民が有する如何なる権利も請求したり保持することができない」と法律で定められています。後述のように、彼等の生活は下級貴族並の高水準なものでした。

外からは窮屈に見えたでしょうが、ヴェネツィアのゲットーは活気に溢れていました。律法歓喜祭の儀式について当時の人はこう書き記しています。「この日の晩は、カーニバルのような有様になる。未婚の女性も既婚の女性も仮面を着け誰か判らないようにして、全てのシナゴグを歩いて廻る。この時ばかりはキリスト教徒の紳士淑女も好奇心に駆られ、この有様を一目見ようと人だかりになる。……」。今に残るヴェニスの仮装カーニバルの始まりです。

優れた福祉制度： 神殿の時代からクッパ(献金箱)はユダヤ人の福祉共同体の中心でした。各クッパには3人の信用おける保管者が就きます。ユダヤ法では施しは義務なので、彼等は献金しない者から強制取り立てできました。

福祉の支給は、衣類、貧しい人のための学校教育、貧しい女子のための結婚持参金、貧しい人のための過ぎ越し祭の食べ物とワイン、孤児・老人の生活保護、貧しい人の埋葬、囚人と難民への救済、という具合に綿密に類別され、それぞれに独自の基金と管理機構がありました。「各自の能力に応じて集め、各自の必要に応じて配分する」というモットーは共同体全体が苦況に在っても常に実行されます。1160年当時、平均で4人の寄贈者に対して一人が救済を受けています。

最も有能なビジネスマン： エルサレム追放により聖職者はいなくなり、代わったラビは多くの場合、最も勤勉で有能な商人でした。ユダヤ人は世界史における最初の偉大な合理主義者になります。その結果、ユダヤ人は組織だった、しかも問題処理能力を備えたビジネスマンに成って行きます。

ユダヤ人の荷物だというだけで、没収されることもありました。ユダヤ人は迫害のリスク回避のために顔の見えない財務を行い、信用状(L/C)の発展と共に無記名債権を創設します。

彼等は信用貸し制度を編み出し、有価証券を発明し、迫害の恐れのある地域でもその使用を押し進め、グローバルな経済活動を行います。国を持たない民族にとっては、世界が故郷なのです。

近代的通商システムはユダヤ人だけで作り出したものではありませんが、ユダヤ人は株式市場を作り、営業機能の重要性を理解し、できるだけ大きな市場を標的とし、薄利多売を実行し、高感度で高速の情報網を構築・活用します。ユダヤ人は近代資本主義の成立において、その人口からは考えられないほどの貢献をしています。

16. 差別から解放されたユダヤ人

ヨーロッパ諸国ではユダヤ人を2級市民として差別する法律が制定されていますが、イギリスにはそのような法律がなく、17世紀のピューリタン革命の頃より、この国らしく実用本位で対応します。

英国にきたユダヤ人は、ユダヤ人に関する何の条例も作られていなかったせいで、完全な市民となります。彼等の中からビクトリア女王の厚い信任を得た名宰相ディズレリ（Benjamin Disraeli 1804~1881年／小説「Vivian Grey」の作家）（Disraeliは”イスラエルを出た”の意）（彼は“*There are three kinds of lies : lies, damned lies, and statistics*”という含蓄ある言葉を残しています）や、ロンドンとパリで金融業を営み、大財閥となったロスチャイルド家（スエズ運河建設資金を出したり、第一次大戦の際にユダヤ国家建設の約束をさせるなど政治力を発揮した）など英才や成功者を輩出し、ユダヤ人の地位を向上しています。

アメリカに移民したユダヤ人も、最初は地域によっては植民地の母国オランダ等の法律に縛られて2級市民の地位に甘んじますが、1763年に英国がアメリカの東海岸を制覇して支配するに至り、完全な宗教の自由を得、禁じられてきたシナゴグの建設も自由になりました。アメリカがユダヤ人の一大拠点になるのです。アメリカのユダヤ人は最初から共同体組織を形成せず、教会のような会衆組織を作ります。ヨーロッパのユダヤ人は特定のユダヤ人共同体に所属したのに対して、北米のユダヤ人は特定のシナゴグに所属しました。北米のユダヤ人は他の如何なるユダヤ人居住地とも違う性格を持ち、やがてはシオニスト国家（現在のイスラエル）を実現させる第3の勢力となります。

現在のアメリカでは金融、メディア、映画、音楽、学会などの社会の大物の多くがユダヤ人で占められているのが現実です。

17. スピノザの神

Baruch De Spinoza(1632~1677年)はオランダ在住のユダヤ人で、デカルト、ライブニッツと並ぶ合理主義哲学者として知られ、ゲーテ、アインシュタインなど後代の多くの文化人に影響を与えました。スピノザは聖書は科学的にアプローチし、自然現象と同じように研究すべきであるといいます。

まず、ヘブライ語の分析から始め、聖書の各所に出てくる表現を分析・分類し、その上で歴史的脈絡を調べるのが順序であると彼は主張します。「各書の著者がどんな人生を歩み、何を行い、何を求めたか、彼は何者だったのか、どんな時代にどんな経緯でその書を書いたのか、誰を読者として何語で書いたのか、……それから各書の歴史を問おう。それは当初どのように受け止められたのか、誰の手中に収まったのか、それは幾つの異本があるのか、誰の意見で正典に加えられたのか、そして如何にしてこれらの書が聖なる一冊の書物として世界に受け入れられたのか」。スピノザはこの分析を実行し、五書のどの部分がモーセによって書かれたか、ヨブ記やダニエル書などはどこから来たのか、各書が全体として、或いは各部分がどの時代に位置づけられるのかを論じます。

要するに彼は聖書の起源と権威に関する従来の見方をほぼ完全に退け、代わりに聖書そのものの中にある証拠から説明を試みたのです。こうしてスピノザは聖書本文批評の最初の第一歩を踏み出したのです。多くの研究者がこれに続き、250年の間に、聖書は一字一句正しいという信条は崩れ去り、聖書は不備もある歴史資料に格下げされます。スピノザの著作とその影響力は、キリスト教の自信と内的一貫性に取り返しのつかないダメージを与えました。

1656年、23歳の彼は恐ろしい呪いの言葉（「彼の上に夜も昼も呪いあれ！寝ても起きても、家の外にあって内にもあっても呪われよ！主が彼を再び赦すことも認めることもないように！…この空の下から彼の名前が永遠に消されますように！」）と共にユダヤ教から破門され、父の家から追い出され、アムステルダムからも追放されました。最終的にはハーグに落ち着き、国家や友人の貴族たちから提供される僅かな年金で慎ましい学究生活を送りました。

スピノザが言わんとしたのは「我々が思っているような意味で神が存在するのではない」と言うことです。何が正しいかに応じて運の善し悪しを割り当てるような神の摂理を彼は一切認めません。彼はヨブ記に答えを出したのでしょう。死後出版された「倫理学」を読むと、彼が異様なまでに徹底した汎神論者であったと判ります。彼は「倫理学」の中で、個体はもっと大きい個体の部分を成している可能性があり、しかもそれを無限に繰り返すので、「自然全体は一つの個体であると容易にとらえることができる」と書いています。神を現実の総体と認識しているのです。

アインシュタインは「貴方は神はあると信じるか」と問われ、「私はスピノザの神を信じる」と答えています。

18. ナチスによる民族浄化

1922年4月12日に、ナチス結党3年目のアドルフ・ヒトラーがミュンヘンで後のユダヤ人虐殺を思わせる次のような驚くべき演説を行っています。問題は、この演説がドイツ人の心に強い共感を生んだことです。

「キリスト教徒としての感情は、私を戦士としてのわが主、救い主に向かわせる。それが私の目を向けさせるのは、嘗て孤立し、僅かな弟子たちによってのみ囲まれ、これらユダヤ人をそれが何物であるかを見分け、人々に彼等と戦うように呼びかけた人物、そしてこれこそ絶対の真理だが、受難者としてよりも戦士として最も偉大な人物なのだ。一人のキリスト教徒、一人の人間としての無限の愛の中で、私は如何にして主が最後に神の力を以て決起し、災いをもたらす者どもを捕らえて、毒蛇どもの巣窟であるかの寺院から追放したかを述べるくだりを読み進む。ユダヤの毒と戦う世界のための神の闘いはどれほど素晴らしいものだったことか。それから2000年の歳月を経た今日、最も深い情動を以て、これまでになく強く心から、イエスが十字架の上で血を流さなければならなかったのはこのためだったという事実を、私は認める。キリスト教徒として、私は自分が欺かれるのを許す義務を持たないが、真実と正義のための戦士になるべき義務は持っている。そして、一人の人間として、人類社会が、2000年ほど前の太古の世界の文明——同じこのユダヤ人によって壊滅に追い込まれた文明——と同じような破滅的な崩壊に苦しめられないように注意する義務を持っている」。(Norman H. Baynes(ed). The Speeches of Adolf

Hittler, April 1922-August 1939(2 vols., Oxford University Press, 1942), vol. 1, pp. 19-20)

1934年(第33回上演年)、オーバーアマガウの300周年記念「受難劇」はナチスの格好の宣伝材料となります。入場料を格安にし、汽車の運賃を値下げして集めた観客は44万人。ナチス新政府はポスターに「ドイツはあなたを呼んでいる」と印刷させます。ヒトラーは選挙の直前に観劇することによってオーバーアマガウの人気を利用しました。法王庁はこの聖誕劇に *Missio canonica* (教会法に基づくミッション) の公式許可を与えました。



ヒトラーと聖誕劇出演者一同

ユダヤ人側から見ると、ナチスに利用された忌むべき歴史、聖誕劇そのものがユダヤ法と乖離が甚だしいことで、大戦後、繰り返しアメリカのユダヤ人協会からクレームが付けられて

います。ユダヤ法では ①ユダヤ人は冷静な判断力を保つため、夜間は最高法院の審議を行わない定め、②弁護人のつかない裁判は無効である、③ユダヤ人の死刑は石打刑、といった明白なルールが全く無視されている、④ピラトが寛容な人物のように書かれているが、彼こそ残虐無道な統治を理由に本国政府から罷免された人物でないか、⑤マタイ福音書27章25節にある「民はこぞって答えた。『その血の責任は、我々と子孫にある。』」これこそナチスが600万人のユダヤ人抹殺の理由に使った台詞であり、ドイツ人がそれを使うのはアウシュウィッツの反省がないのか、といった厳しい内容です。

結局、代表者の折衝によりそのクレームは活かされ、今日ではピラトは残虐な風貌と衣裳に改められ、台詞

もお互いが妥協できる範囲で修正されています。

聖書が書かれたのは西暦 50～90 年代(マルコ 50～60 年、マタイ・ルカ 70～90 年、ヨハネ～90 年)の頃であり、ローマ帝国内で公認され、勢力を伸ばし、やがてローマの国教になり、政治と一体化するキリスト教側としては、ローマの行政官の悪行は文書にできなかったという事情があるのでしょう。

19. 現在のイスラエル国

ユダヤ人たちはイギリス及びアメリカに何の偏見もない安住の地を見出しましたが、祖先の地シオン(エルサレム)において国家を再建したいとの強い願いが代々受け継がれてきました。中世の強国・オスマントルコの没落とユダヤ人に同情的な英国の中近東進出に伴い、その機が熟してきます。

19 世紀初頭頃から聖地巡礼や大学建設や入植などいろんな活動が行われますが、1882 年に第 1 次シオニスト会議が開かれてより、そのような活動が組織化されます。

1917/11/2 には英国外相バルフォアがシオニズム支持を表明、翌月には英軍はオスマン軍を破ってエルサレム入城を果たします。1920 年には英国軍需相ウインストン・チャーチルがユダヤ人国家支持を表明、世界の各地からパレスチナに向かって、ユダヤ人の入植が盛んに行われます。

1931 年の第 17 回シオニスト会議でユダヤとアラブ両民族の二民族共存国家構想が支持されます。

1937 年に英国は西部をユダヤ人地区とアラブ人地区を分離することを提案したが、アラブ側が拒否します。

1948/5/14、イスラエル国として独立宣言を行い、ベングリオンが初代首相となりますが、同時にアラブと第一次中東戦争が勃発、イスラエルは人口の 1 割を戦争で失いながらも大勝利し、国連決議より広範囲の地域を占領しました。

1949/5/11 にイスラエルが国際連合に加入します。1956 年に第二次中東戦争、1967 年に第三次中東戦争(6 日間戦争)でイスラエルはエジプト、シリアを相手に戦い、圧勝します。

1973 年にエジプトと第四次中東戦争を起こし、一時、イスラエルの不敗神話が敗れる事態がありましたが、シャロン将軍が戦線に復帰するとスエズ運河渡河作戦を実行して形勢が逆転し、17 日間で停戦します。

1977 年にエジプトのサダト大統領がエルサレム訪問、1979 年にイスラエル・エジプト平和条約を締結、イスラエルは占領していたシナイ半島をエジプトに返還しました。その後はこのような大きな戦争はありません。

先住民であるアラブ系のパレスチナ人は地図の「ヨルダン川西岸地区」と「ガザ地区」に押し込められ、今日の「パレスチナ問題」を引き起こしています。

平和を選んだエジプト等を除いて、同じアラブ人であるとの連帯感からイランなどは敵対感情を隠さず、イスラエルの背後にいるアメリカとも対立しています。



イスラエル地図(Wikipedia)

20. ユダヤ人は何故聡明なのか

米国の知識階級の上位を占めるユダヤ人： ユダヤ人の中でも、アシュケナージ系(ヨーロッパ系)のユダヤ人の卓越した知能は衝撃的です。著名な科学者の中でユダヤ人が占める割合は、合衆国とヨーロッパでの彼等の人口比率から予想される値より 10 倍も高いのです。

過去2世紀で彼等は全ての科学関連のノーベル賞の1/4を獲得していますが、彼等の数は世界人口の0.25%にも足りません。彼等はアメリカ人の3%に足りませんが、その期間にアメリカ人に授与されたノーベル賞の27%、数学のチューリング賞の25%を獲得しています。具体例を挙げれば、アインシュタイン、ノイマン、リチャード・ファインマン、ジュリアン・シュウインガー、マレー・ゲルマン(Quarkの父)、エド・ウィッテン(超弦理論)、グレゴリ・ベレルマン(ポアンカレ予想を証明)などです。

アメリカのビジネス界のCEO(経営最高責任者)の約20%、学問ではアイビーリーグの学生の22%を彼等が占めています。映画を始めとするエンターテインメント業界の創始者、経営者は殆どアシュケナージ系ユダヤ人で占められており、プロデューサー(スピルバーグ等)、俳優(ポール・ニューマン、トニー・カーティス、カーク・ダグラス等)にも多くのアシュケナージ系ユダヤ人が活躍しています。

20世紀の世界チェスチャンピオンの半数がアシュケナージ系ユダヤ人です。

ユダヤ人の知能指数： 知能指数 IQ (Intelligence Quotient) は歴史に裏付けられた信頼できる指数です。

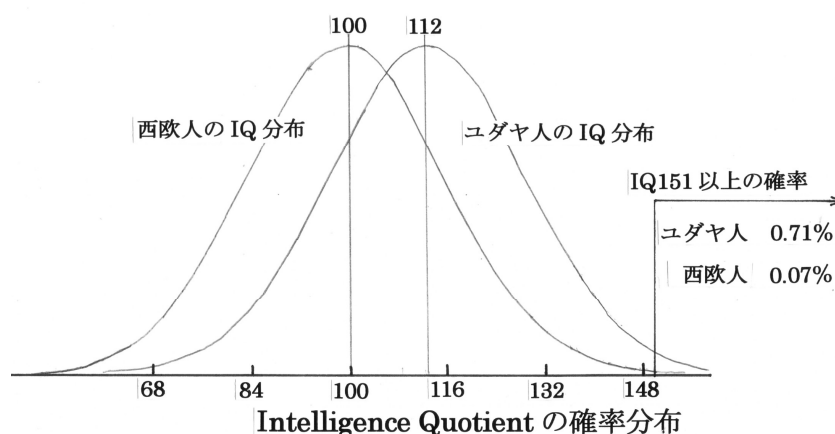
例えば、12歳の少年が22歳の大学生の講義内容を習得できるばあいは、 $IQ = 22/12 \Rightarrow 183$ とカウントします。知能指数は遺伝的要素が非常に強いことが、よく知られています。

IQは正規分布します。西欧人の平均IQ=100、標準偏差 σ (シグマ)=16程度です。アシュケナージ系ユダヤ人の平均IQ=112で、知能に関し、ユダヤ人は西欧人より約0.75 σ 高い位置にいます。

正規分布表によれば、平均値より上の方の存在確率は、 $3.20\sigma = 0.07\%$ 、 $3.20 - 0.75 = 2.45$ で $2.45\sigma = 0.71\%$ ですから、アシュケナージ系ユダヤ人で平均より2.45 σ 知能指数が高い人の割合は、西欧人で平均より3.2 σ 知能指数が高い人の割合の10倍になります。具体的には、IQ=151以上の人の割合がアシュケナージ系ユダヤ人の場合は0.7%で、西欧人の0.07%の10倍に相当するということです。

これ位の知能指数がないと、これらの分野では真の成功を収めることができないということになるでしょう。

面白いことに、アシュケナージ系以外のトルコ系や東洋系のユダヤ人の平均的知能指数は西欧人と全く同じレベルにあります。



ユダヤ人は何時から聡明になったのか：

古代の各種の文書にはギリシャ人の聡明さは至るところに言及されていますが、

ユダヤ人がそのように書かれたことは全くありません。ギリシャ・ローマ時代にはユダヤ人は他の民族に比較して、特に聡明で際立っていることはなかったようです。ローマ時代のユダヤ人は職人や労働者として働く人たちが殆どでした。彼等が聡明になったのは、その後のことなのです。

アシュケナージ系ユダヤ人は10世紀頃より、前述した経緯でローマ帝国や、その後継者である西欧諸国で迫害を受けたために、ユダヤ教を捨てて周囲の民族に同化する多数の脱落者を出します。

辛い状況に耐えて残った少数派の頑固なユダヤ人は、**孤立した集団を作って同族結婚を守り**、改宗者を受け入れなくなります。迫害が厳しさを増した12世紀頃には、彼等はいよいよ一つの職種へと特化しています。金貸しです。キリスト教徒は高利貸しが禁止されていたためです。このパターンは数世紀続きます。

この時代には、その多くは未亡人であるとは言え、女性の金貸しも多数見受けられています。

金貸し業は高いIQが要求されます。人類史上、これほど長期間、高いIQが必要な職業に大部分の人たちが従事していた集団は他には存在しません。

この時期、アシュケナージ系ユダヤ人は市民としての諸権利では、二級市民として差別的扱いを受けていますが、経済的には成功し、彼等の生活水準は下級貴族と同程度でした。当時のアシュケナージ系ユダヤ人の家系図を調べると、貧しい家庭よりも裕福な家庭の方が、子供が育って成人になる確率が高いのです。非ユダヤ人の資料ですが、1764年のブルージュ（「北のヴェネツィア」と呼ばれるベルギーの都市）の公文書は「家を所有している家庭では子供が2.4人いたが、小作人所帯では1.2人」と述べています。通常、成功者の血筋が貧乏人より多く社会に残って行くのです。このようにして、アシュケナージ系ユダヤ人は知能の高い者たちを強く選択淘汰するプロセスに曝され、集団としての平均的IQを高めて行きます。

後に活動の自由度が増してくると、とびきり複雑な仕事得意なアシュケナージ系ユダヤ人たちの職業は金融業、不動産管理人、土地差配人、徴税請負人、商人、企業家など、今で言うホワイトカラー業に集中して発展します。

1791年にフランスは法的平等をユダヤ人に与えた最初のヨーロッパの国となり、ナポレオンの征服によってその政策はヨーロッパ大陸中に広がります。（前述イギリスには始めから差別条項がなく、大陸に200年先行していました）ユダヤ教内にも啓蒙思想を支持する運動が発生し、アシュケナージ系ユダヤ人たちはゲットーから外部に出て行きます。時間と共にアシュケナージ系ユダヤ人の科学者や芸術家が圧力鍋の蓋を外したように輩出するようになりました。

トルコなどのイスラーム社会に住んでいたユダヤ人たちは、アシュケナージ系ユダヤ人と異なった職業パターンをとっています。迫害の圧力が少なかったためにヨーロッパより遙かに多くのユダヤ人が住んでいて、ホワイトカラー系の仕事に就ける人の数が限られていたことと、14～20世紀のイスラーム社会の衰退期には労働者、特に汚れ仕事に就く人たちが多かったのです。こうした仕事はIQが低くても構いませんでした。

ユダヤ人は遺伝的に他民族と違うのか：ユダヤ人の定義から見ると、ユダヤ人とは人種とは言えない存在です。民族的な違いがある筈はないというのがこれまでの人類学者たちの主張でした。しかし、遺伝子工学が進んできて、アシュケナージ系ユダヤ人が遺伝子的に特異な集団を形成していることが明らかになりました。知能を高める一塩基多型(SNP：Single Nucleotide Polymorphisms)の遺伝子選択が、他の民族では見られない高率で特異な遺伝子病を発症させるのです。テイ・サックス病、ゴーシェ病、家族性自律神経障害、捻転ジストニー病などがそれです。これらの中でニューロン間の接続を増やす性質を持つ遺伝子が複数発見されつつあります。遺伝子のコピーが1個の場合は知能が高まるが、2個になると発病するタイプのSNPが複数発見されています。

結論はこうです。「平均的な知能の集団でも、その集団が数百年間、遺伝子的に独立集団を守り、知能による選択淘汰を行えば、アシュケナージ系ユダヤ人のような高い知能を持つ集団を作ることができる」。

他にも人類の選択淘汰例はないか：「この4～5万年の間に、人類には生物学的変化は全く見られなくなった。私たちが文明と呼んでいるものは全て、同じ肉体と頭脳の上に築かれたものである」(S.J.グールド)



今まで主流であったこの意見は正しく無いようです。実際には遺伝子工学の分析では、むしろ間氷期の始まり（約12,000年前）、農業の成立時点から、人類には過去の100倍もの速さで遺伝子レベル（特に1塩基多型(SNP)）での急速な進化が始まっていることが遺伝子工学者によって、現在、明らかにされつつあります。

左図はSNPの実例を示すものです。遺伝子の中のたった1カ所の塩基が変異しただけで、筋骨隆々のイヌが生まれるのです。この遺伝子が

一塩基多型(SNP)の例（日経サイエンス 2009/4、p40）

一対の染色体の両方にあると、過度に筋肉質になって身体に異常を来しますが、片方だけにあれば適度に筋肉質になり、走る能力が強化されるのです。

アシュケナージ系ユダヤ人では、このような SNP が知能面で起こっていました。

灌漑農業は必然的に支配階級を作り出します。狩猟採集時代の人間なら、抑圧を感じたら、そこを立ち去って別な場所に移動できました。対照的に、農民にとって農地は諦めるには高価過ぎました。支配者は攻撃的な個人を排除する傾向があります。世代と共に農民たちの攻撃性は減少し、権威への隷属性が強化されます。軍隊は上官の命令に絶対服従する究極の隷属性社会です。近代国家が必要とする強力な近代的軍隊は、隷属性なくしては機能しません。

攻撃的で好戦的な遺伝子 DRD4・Repeat7 の遺伝的多型(ADHD(注意欠陥障害)を引き起こす遺伝子型)は世界の各地でかなりの程度見られますが、東アジア(特に中国)では全くといってよいほどに見られません。

Repeat7 対立遺伝子を持つ者は中国の文化パターンにそぐわなかったために、選択的に排除された可能性があります。

権威への服従という性質が有利に働く選択とは**家畜化に非常によく似ています**。

農業によって可能になった強い政府が、本質的に人々を「飼い慣らす」のなら、農業経験が浅い、或いは全くない集団のメンバーは、平均的に見て余り従順でないと予想されます。そのような民族は「束縛に耐えようとしないう」のです。アメリカ先住民族やブッシュマンがよい例で、後者は「南アフリカのアナーキスト(無政府主義者)」とまで呼ばれています。

農業が作り上げた国家社会という形態は、特別の個性を選択淘汰しています。彼等はその瞬間の楽しみよりも、将来の成功のために現在を我慢する個性を選択淘汰します。農民はひもじい思いをしても、種子用の穀物を食わずに我慢します。狩猟採集者には禁欲の伝統が無く、例えばブッシュマンに牧畜を教えても、彼等は飼っているヤギを全部食べてしまうので失敗例が多いのです。

忍耐、自制、短期的な満足よりも長期的な利益を大事にする能力などが選択淘汰により、長い間、農業を営んできた人たちの間で強化されています。これこそ、近代国家を構築するに不可欠な要素です。歴史的に農業経験が短い、或いは全くない遺伝子集団を近代人に改変しようとする試みの多くが難航・挫折する原因が、ここに 있습니다。

先進国と言われる国家は、農業国から脱皮して人口の多数が一次産業である農業から二次産業(工業)や三次産業(サービス業)に移行して、産業立国を果たした国々を指します。購買力平価で比較すると、先進国の国民 1 人当たり GDP(国民総生産) は世界平均の約 3～4 倍のレベルにあります。日本が真の先進国入りしたのは、1960～1980 年代の高度成長期を経てからでした。1960 年の農業就業人口 1,196 万人(26.6%) が、2006 年には 252 万人(4%) になっています。そしてホワイトカラーのような頭脳労働者の比率が短期間の間に非常に高くなっています。先進国は全てこの傾向にあります。我々は、このような環境の変化が何をもたらすかの事例をアシュケナージ系ユダヤ人に見ています。

本論から外れますが、ユダヤ人に並んで注目すべき民族がいます。インド人です。彼等の数理能力の高さは世界公認です。彼等は紀元前 13 世紀頃からアーリア人のインド支配に伴い、内婚集団であるカースト制(バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラ)を形成し、現代まで約 3,300 年を経過しています。

カースト制は高温多湿の厳しい衛生環境に対する一つのソリューション(上層階級を伝染病から隔離)だったようですが、これがどのような人為選択結果を生んでいるか、今後の研究が待たれます。

現在、ユダヤ人の人口は世界全体で約 1,350～1,600 万人と推定され、イスラエルに約 460 万人、アメリカに約 580 万人(ニューヨークに約 120 万人) と言われます。

ユダヤ人の定義(①ユダヤ人の母、②ユダヤ教徒) からも、ユダヤ人は人種とは言えない不思議な存在です。

今では、古代からの血統を嗣ぐ者は1割もいないと言われています。

だが、歴史の現実として、**ユダヤ人を味方にした国家は**、彼等の世界的情報網や金融力や優れた才能に助けられ、**国勢が盛んになっています**。16世紀の「**陸の帝国オスマントルコ**」(スレイマン一世時代、最大輸出国・日本(安土・桃山時代)から大量の鉄砲を輸入)、19世紀の覇権国「**海の帝国イギリス**」や、20世紀の覇権国「**空の帝国アメリカ**」が良い例です。

これはユダヤ人の力もさることながら、彼等を社会に許容し包摂する自由で闊達な精神が、その民族自体が持てる力を最大限に活性化することなのでしょう。ユダヤ人を受け入れ始めた頃から、イギリスでは農業革命、産業革命、植民地支配と世界をリードする200年の隆盛期が持続しました。

今日の日本は、その対極にあります。

ユダヤ人は何時何処で迫害が起ころうと、それに負けずに新天地に活動の場を得られるように、①**血縁によるグローバル化**、②**契約至上主義**、③**徹底した才能尊重**、を貫いています。この特性は今日のようなグローバル化世界に生きる全ての人たちにとって、ますます必要な要素となっています。

人口は少ないながら、世界を動かす大きな力を持つユダヤ人から目が離せません。

以 上

参考にした文献

「ユダヤ人の歴史(上巻)」ポール・ジョンソン／石田友雄監修：徳間書店

「ユダヤ人(上)」マックス・ディモン著／朝日選書

「書物としての新約聖書」田川建三著／勁草書房

「古代文明と気候大変動」ブライアン・フェイガン／東郷えりか訳：河出書房新社

「暴走する文明」ロナルド・ライト／星川淳訳：NHK出版

「一万年の進化爆発」G.コ克蘭、H.ハーペンティング、訳古川奈々子／日経 BP 社